

## クロード・モネ展 風景への問いかけ

アーティゾン美術館（東京・京橋） 2021. 10. 20～21. 01. 10

本展は、世界最高峰の「モネ・コレクション」を有する「オルセー美術館」の作品を中心に、国内の作品と合わせて構成しモネの風景画家に迫る企画である。

「クロード・モネ」(1840～1926)の画業の重要な時代と場所である「ル・アヴル時代」「アルジャントゥイユ時代」「ヴェトゥイユ時代」「1880年代の旅の時代」「ジヴェルニー時代」をたどり、夫々の土地で何を見てどのように描いたのか。

そしてどのような主題をイメージに込めたのかを探る企画で、時代を追っていき、画業の終盤に手がけた《睡蓮》へと至る過程をなぞることで、個々の作品が連続性の中で発展していることを示していく構成となっている。

《かささぎ》 1868～69年



エトルタに滞在時の冬に描かれた雪景色で、白一色の風景は、自然の中の光と影の効果を追求するには好都合であった。

つまり、光が当たる雪の白に対して、影の部分の寒色系で表現できたためである。

画面中央の水平に伸びる柵の影と背後の屋根や木立の影は青紫色で、左側の木戸の上

に上半身が黒い「かささぎ」が休んでいる。

《サン・ラザール駅》 1877年



幼年期を過ごした汽車が発着するサン・ラザール駅は、鉄道の線路と蒸気に包まれてきらきら輝く車体は魅力あるテーマであった。蒸気機関車の吐き出す煙と水蒸気は、一番新しいパリの断面を与えてくれ、日常的なリアルな光景として描きながら、光の効果を描き分けている。

《睡蓮》 1903年



画伯の《睡蓮》は、同じ場所で同じ作品を時間や季節を変えて描く「連作」で、このテーマの作品は数多いことで知られている。

作品の構図は、地平線を完全に切り除いた水に浮かぶ植物や水面に映える空や木々を見下ろす独創的かつ大胆であり、後の抽象表現主義の画家たちに多大な影響を与えたという。